

教材の本質をふまえた体育指導のあり方

～ 体づくり運動を通して ～

I 研究の内容

1 研究の具体的内容

- (1) 理論研究や授業づくりの話し合い等を通して、子どもたちが主体的に取り組むことができる学習内容や学習過程を考え、授業案を作成する。
- (2) 授業案をもとに授業実践を行う。その成果と課題について話し合い、今後の授業や研究に活かしていく。

2 授業研究

4年生 「東雲アドベンチャーランド」 (体づくり運動)

小宮山 公仁 教諭 東雲小

6年生 「ようこそGボールワールドへ！」(体力を高める運動)

阿部 伸之介 教諭 牧丘第二小

(1) 授業実践から学んだこと

- ・教師の声かけ、子ども同士の声かけや励ましが的確であると、意欲的に取り組みねらいの達成にも繋がる。
- ・より効率よく、多様な動きを身に付けるために、体のどの部分をどのように動かすかなど児童や教師の言葉で明確にしていくとことが大切である。
- ・様々な用具を使用して、多様な動きをつくる運動や体力を高める運動の実践例を示すことができ、運動例を広げることができた。
- ・子どもの実態をもとに、発達段階や児童数も考慮する中での工夫された学習カードづくりや子どもたちの授業への意欲の高まるような練習方法などを工夫する中で、めあての持ち方や課題に向かったの主体的・探求的な学習を進めることができた。
- ・教員が児童を指導するための引き出しをできるだけ多く持つ必要がある。
- ・多様な動きを身に付ける運動では、運動を子どもたちに工夫させる場面があるが、教師がその工夫の仕方・視点を多く持ち、子どもたちに示していく必要がある。
- ・運動の日常化もテーマになっていたが、日頃から運動している子どもは既に日常化されているわけで、運動をしない子、運動嫌いな子の日常化をいかに図るかという視点が大切である。

(2) 授業実践から、今後さらに研究を深めたいこと

- ・子どもたちが目指す到達目標や具体的な姿、またそのための指導法や声かけ等について、評価の仕方も含めて検討していけるとよいと思う。
- ・どの程度、どんな種目、内容で「体づくり運動」を扱うことが適切なのか。
- ・子どもたちの発育発達段階にあい、子どもたちが自然に意欲的に取り組めるような、場づくりや動き、高めたい力など、具体的な中身の洗い出し。
- ・文部科学省のパンフレットで紹介されている「運動」をどのように発展・工夫できるか、またそれ以外にはどんな「運動」が有効か、研究を進めていきたい。
- ・体づくり運動は日常化が図られることが重要だと思う。限られた授業時間の中でどのような手立てで子ども達の意欲付けをしていくのか今後研究を深めたい。
- ・体づくり運動における技術向上のための指導法、またその伝達法。
- ・児童同士の効果的な学び合い、相互評価
- ・体づくり運動における低学年の授業、特に入門期である1年生の授業研究ができればよいと思う。

II 成果と課題

1 成果

- ・体づくり運動の評価という点に目を向けて研究を進めてきたが、動きをより細かく分析することで子どもたちがより効率よく多様な動きを身に付けたり、体力を高めたりすることができた。
- ・体づくり運動の実践をしたことで、体づくり運動のバリエーションが広がり、体づくりに対する意識が高まったように思う。
- ・子どもたちが工夫して運動が出来るような「工夫の視点」のバリエーションが広がった。
- ・いろいろな授業の形態が見えてきたこと。
- ・これまでの成果を考えながら、新しい取り組みを試そうとしていた。体づくり運動としての授業の可能性を探り、改めて日頃の授業内容を考える刺激となった。体づくり運動でもどの領域でもそうであるが、日々の実践の積み重ねに尽きる。多くの実践があったので、確実に体づくり運動へのとらえがついてきている。

2 課題

- ・各発達段階においての子どもたちの到達目標や具体的な姿、評価の仕方などを明らかにし、そのための指導法について研究していく必要がある。
- ・「日常化」するための手だて・工夫はまだ、研究していく必要がある。
- ・低学年の授業実践ができないという状況が残念に思う。

(部長 向山 敬)